

相洞寺 江沼郡下福田村

宗秀院 江沼郡上野村

大淨院 江沼郡上野村

金剛院 江沼郡那谷村

彌勒院 江沼郡那谷村

持寶院 江沼郡那谷村

醫寶院 江沼郡那谷村

連行院 江沼郡那谷村

堯花院 江沼郡那谷村

玄常院 江沼郡那谷村

金性院 江沼郡那谷村

ヤマブシアナ 山伏穴 羽咋郡柳田に在る。

能登名跡志に、『一宮祭禮には石動山の衆徒來り、隣村柳田村に岩窟あり、此所に暫く籠り、神輿を待請け、山伏姿にて法螺を吹也。此穴を俗に山伏穴といふ。』と記する。

ヤマブシヤマ 山伏山 珠洲郡の東北端に近く、狼煙山・嶽山・須須の御嶽・鈴嶽ともいひ、須々奥宮神社の鎮座する所である。高さ一七二米。地質第三紀層。能登名跡志に、『三崎の山伏山として、此の國五十里のとまり、北のはてにある高山也。是は過半は狼煙村の領也。元は鈴嶽ともいへり。渡海の船難風に

出合ひ、三崎權現に祈るに火見ゆる也。依て狼煙の名あり。此山を廻れば三崎權現也。今に太守より夏中、山の半途に大なる燈明堂ありて、一夜に油一升・燈心布三尺宛渡りて、渡海のたすけとなし給へり。誠に此山は、海中五十里指出る尾に在り。高山にて其上古木も覆うて、渡海の見當となる名山也。』と記する。

ヤマベ 山邊 鳳至郡櫛比庄に屬する部落。

ヤマベオキエモン 山邊沖右衛門 父藤左

衛門は御歩であつた。沖右衛門も亦元祿四年御歩に列し、享保十六年小頭として新知百石を受け、寛延二年廣尾御前附御用人並となり、廣尾御前逝去後寶曆元年組外に列し、同九年六月歿した。子左盛政誠以後相襲いで藩の祿を受ける。

ヤマベオキタロウ 山邊沖太郎 諱は政勝。藩士山邊沖右衛門(後代)の子。その學問は淺かつたが、氣魄の雄渾は他の追隨を許さなかつた。沖太郎幼時保母の誤る所となつて右腕を折つたので、左手を以て劍を學び、壯者と伍して決して敗を取らなかつた。後執政本多政均を以てその處置國事を誤るものなりとし、明治二年八月七日井口義平と共に之を二丸殿中に刺殺し、四年二月十四日刑獄寮に於いて自刃を命ぜられた。享年廿八。

ヤマベクエモン 山邊九右衛門 初め浪人で伏見に住し、次いで加藤清正に仕へて三百石を領したが、その歿後再び浪人となり、慶長十九年大坂陣の際京に於いて前田利常に屬し、御歩となりて六十俵を受け、寛永十年六月十日歿。曾孫沖右衛門の時から士列に進んだ。

ヤマボ 山保 珠洲郡飯塚の内の小字。

ヤママツリ 山祭 藩政の頃、二月九日と十一月九日とに之を行つた。初は山神が樹木の種子を播き、後はその種子を集める日であるといひ、主として山間部落に於いて柚木・炭焼・大工等が、終日山に入らず、利器の使用を止め、神棚に牡丹餅等を供へた。

ヤママハリ 山廻 加賀藩では、寛文三年十月から之を置き、初は武士であつたが、後に百姓中に就いて御郡所が撰任することになつた。山廻は山奉行に屬し、擔當區域の山林を視察し、一切の事項を上通下達した。山廻の扶持を受けるを御扶持山廻といひ、然らざるは平山廻である。山廻老いて職を退く時は山廻列となる。加賀では能美郡を除く外皆山廻があつた。能登では山廻の名で鹽見人又は鹽吟味人の職を行ふものがあり、長氏の舊領鹿島半郡の山方御用に從ふ者に、半郡山廻と稱する二人があり、奥郡にも藩有林のみの取締に任ずる山廻二人あつて、何れも十村列又は新田裁許列から兼務する者であつた。前記の外能登には普通の山廻なく、その山方御用は山廻足輕の勤務する所であつた。

ヤマムラチカヤス 山村慎居 通稱善左衛門。初め閑悦と稱して御居間坊主であつたが、享保十五年祿十五俵を加へて三十俵を受け、同年新知百三十石を得て新番に列し、十四年百石を加へて組外に列し、十五年加増百石、十八年加増百二十石奥小將、元文三年加増百石物頭並、五年加増百五十石、同年加増百五十石で八百五十石に至り、延享三年御先弓頭に任じ、寶曆八年御免、十年三月廿七日六十四歳を以て歿。子孫世々藩に仕へる。

ヤマムラナホハル 山村直温 字は德基、竹坡と號した。祖父直昌の時から加賀藩に仕へたが、直温は眼疾によつて勤に服せず、家居して文を論じ詩を賦し、死に至るまで止めなかつたといふ。案ずるに山村氏の系譜に甚五郎がある。享保四年直昌の子市十郎直雄の後を受けて五百石を領したが、十年四月十四日自殺を仕損じ、長病で五十一歳に歿し、家系斷絶した。直温は是であらう。

ヤマムラナホマサ 山村直昌 通稱次郎兵衛。寛永四年前田利常に仕へて千石を領し、寛文五年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

ヤマモト 山本 江沼郡那谷谷に屬する部落。

ヤマモト 山本 鳳至郡大屋庄に屬する部落。

ヤマモトイヘノリ 山本家藝 一向一揆の首領で、通稱を若狭守といふた。天正四年八月廿一日下間刑部卿法眼宛所の訴狀連署中にその名が見える。前田利家の側室於古和の父を加賀石浦堡主山本若狭守家藝とあるのも、同じ人である。

ヤマモトエンシヨウ 山本圓正 官地論長享二年高尾城攻の條に、山本圓正入道は同輩十人と興して一萬餘人、山科の山王林に陣を取るとあり、加越關譯記永正三年加賀の一揆が越前へ侵入した條に、寄手の方より財町の圓正といふ大剛の法師が驅け出たが、越前の士中村五郎右衛門之と渡合うてその首を取つたとある。山本も財町も當時の居所によつて冒した苗字で、同一人であらう。

ヤマモトゲンチウ 山本愿中 號は威齋。加賀藩の老臣長恭連の醫員であつた。詩を林菴坡に學んで、威齋詩草の遺稿がある。その歿年等は詳かでない。

ヤマモトシゲズミ 山本重純 通稱新兵衛。萬治二年二百石を受けて大小將に列し、御右筆となり、元祿七年に歿。子孫藩に世襲する。

ヤマモトジンゴ 山本甚五 初めて前田利長に仕へて四百石を領した。子孫藩に世襲する。

ヤマモトセイザブロウ 山本清三郎 初めて前田利常に仕へて五百石を領し、後系五代